

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

- ▶ 空間的移動を表す「動詞＋テクル」「動詞＋テイク」一日
中対照研究の視点から

doi:10.29714/TKJJ.199903.0011

淡江日本論叢, (8), 1999

作者/Author：鍾慈馨

頁數/Page：208-217

出版日期/Publication Date：1999/03

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199903.0011>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



空間的移動を表す「動詞+テクル」「動詞+テイク」 — 一日中対照研究の視点から —

淡江大學専任講師

鍾 慈 馨

一. はじめに

日本語では、「動詞+テクル」と「動詞+テイク」の形で、話題とする事物・事柄が、空間的・時間的又は心理的に、話し手に接近したり、或いは話し手から遠ざかったりする状況を表わすことができると言われている。(注1)

例えば、田中さんは部屋の奥から出てきました。(空間的接近)

田中さんは何も言わずに外へ出ていきました。(空間的遠離)

世界情勢を何年間にわたって、見てきました。(時間的接近)

どうなるか分かりませんが、もう暫らく様子を見ていきます。(時間的遠離)

その顔がみるみるうちに笑顔になってくる。(心理的接近)

その顔がみるみるうちに笑顔になっていく。(心理的遠離)

しかし、「動詞+テクル」「動詞+テイク」の表現を考察してみると、それは動詞及びそのテ形につく「クル」「イク」の組み合わせによって、空間的移動・時間的推移・心理的動きを表わすことができるのみならず、「テクル」「テイク」の前につく動詞そのものの性質の違いによっても、話題とする事物や事柄がそれぞれ違った状態において空間的・時間的・心理的動きを表わすことができると考えられる。本稿では、そのうちの空間的移動に焦点をしばって、日本語動詞の性質の違いで「動詞+テクル」「動詞+テイク」表現の意味はどう違っていくのか、そして、中国語話者にはどう理解されているのか、それを中国語と対照しながら、さぐっていくことにする。

二. 空間的移動

(一) 移動性を持つ動詞と移動性を持たない動詞

日本語「動詞+テクル」「動詞+テイク」の形式で表わす空間的移動表現にかかわる「テクル」「テイク」の前につく動詞には移動性を持つものとそうではないものがある。例えば、

I 類動詞： 走る、歩く、出る、泳ぐ、飛ぶ、転がる、寄る、帰る、入る、近寄る、
移る、逃げる、通る……。 (移動性を持つ)

II 類動詞： 置く、聞く、休む、泊まる、壊す、知らせる、残す、洗う、見る、預ける、
忘れる、飲む……。 (移動性を持たない)

III 類動詞： 買う、持つ、もらう、送る、借りる、連れる、抱く、拾う、着る、奪う…
…。 (移動性を持たない)

上に述べた動詞の例から、明らかであることは、I 類の動詞はいずれも A 場所から B 場所に移るといふ空間的に移動する性質を持っているのに対して、II 類と III 類の動詞は移動する性質を持たないものである。I 類の動詞で例文を作ると次のようになる。

I 類動詞文

○歩いてくる。〔走來。〕 (注2) (注3)

○歩いていく。〔走去。〕

○帰ってくる。〔回來。〕

○帰っていく。〔回去。〕

○入ってくる。〔進來。〕

○入っていく。〔進去。〕

I 類の移動性を持つ動詞に「クル」或いは「イク」をつけると、移動する動作・行為に方向性が示される。即ち、話し手に動作・行為が接近する時に「動詞+テクル」が用いられ、話し手から遠ざかる時に「動詞+テイク」が用いられる。同じような事柄を中国語で表現すると移動動詞の後ろに日本語の「クル」にあたる〔來〕、「イク」にあたる〔去〕或いは〔走〕をつけると、「クル」や「イク」と同じように、接近する、又は、遠ざかることを表わすことができる。したがって、似ている言語形式なので、中国語を母語とする学習者には I 類動詞の「動詞+テクル」「動詞+テイク」表現を理解することには問題は生じない。

I 類の動詞と違って、II 類と III 類の動詞は移動性を持たないもので、テ形の後ろに「クル」或いは「イク」をつけると、移動性を持たない動作・行為に続き、「来る」或いは「行く」の動作・行為が行われることになる。II と III の動詞で例文を作ると次のようになる。

II 類動詞文

△財布を置いてくる。 (注4)

△財布を置いていく。

△場所を聞いてくる。

△場所を聞いていく。

△皆に知らせてくる。

△皆に知らせていく。

Ⅲ類動詞文

○パンを買ってくる。

○パンを買っていく。

○本をもらってくる。

○本をもらっていく。

○子どもを連れてくる。

○子どもを連れていく。

以上の例文から、それぞれの文には二つの動作・行為が並べられていることが観察できる。例えば、「財布を置いてくる」の文には「財布を置いて」それから「来る」、そして「パンを買ってくる」の文には「パンを買って」それから「来る」という順序で両方の文とも二つの動作・行為が並ぶのである。

しかし、Ⅱ類とⅢ類の動詞は両方とも移動性を持たないものであるが、異なった文の目的語と動詞の組み合わせによって、Ⅱ類とⅢ類の動詞文の性質は違ってくる。

Ⅱ類とⅢ類の動詞の例文から、次のようなことが分かる。Ⅱ類の動詞文には単に連続して行われる二つの動作・行為であるのに対して、Ⅲ類の動詞文は、最初の動作・行為が行われ、そして「来る」或いは「行く」の動作・行為が進行されると同時に、目的語であるものが、動作主によって、何らかの方法で話し手の方に接近するか、或いは話し手の方から遠ざかっていく意味が含まれている。例えば、「パンを買ってくる」の文は「パンを買って、そして、そのパンを持ってくる」ということで、それから「子どもを連れていく」の文は「子どもを連れて、そして、同時に動作主もその子どもも同じ場所に行く」ということである。

なぜ同じ移動性を持たないⅡ類とⅢ類の動詞を二つに類分けするかというと、中国語話者にはⅡ類とⅢ類の動詞文をまったく違った言語表現と理解していると思われるからである。日本語の具体例、及び同じような事柄での中国語表現を下に挙げてみる。

Ⅱ類動詞文

(1) △「奥さん、どうして品物を置いてきたんですか。」

〔太太、為什麼把東西放在那裏不拿呢？〕

「配達を頼んだからです。」

〔請人幫我送達。〕（『ヤンさんと日本の人々』p110）

(2) △田中さん、すみませんが、明日の集合時間を聞いてきてください。

〔田中先生、對不起、請幫我去問一下明天的集合時間。〕

(3) △すみません、財布を家に忘れてきました。

〔很對不起、錢包忘在家裏了。〕

(4) △教科書の第一章を予習してきなさい。明日テストをします。

〔請預習課本的第一章、明天小考。〕

(5) ○飲物を飲んできます。

〔(我)去喝(杯)飲料再過來。〕

(6) ○トイレで洗ってきます。

〔我去洗手間洗一洗再過來。〕

(7) △その人は急いでいたようで、さっき降りる時に、傘を電車で忘れていってしまった。

〔那個人好像很匆忙的樣子。剛才下車的時候、把傘忘在電車上。〕

(8) △あの公園にはたくさん野良犬がいるそうで、毎朝、多くの人がそこを通る時に食物を公園の入口に置いていきます。

〔那個公園聽說有很多野狗、每天早上有很多人經過時會把食物放在公園入口處。〕

(9) △田中さん、今日帰りに一杯飲んでいきませんか。

〔田中先生、今天回家的時候、要不要去喝一杯呢？〕

(10) ○ここでちょっと休んでいきましょう。

〔在這裏休息一會兒再去吧。〕

(11) ○今夜一晩泊まっていきなさい。

〔今晚請在這裏住一宿再走。〕

Ⅲ類動詞文

(12) ○子供たちは海岸に落ちた貝殻を拾ってきた。

〔孩子們撿來了(一些)掉在海岸的貝殼。〕

(13)○ボランティア活動に興味があるので、今度友達を連れてきますから、話を聞かせてください。

〔因為對於義工活動有興趣、下一次我會帶朋友來、請(再跟我們)聊々。〕

(14)○クラスメートは学科の事務室から本を教室に運んできました。

〔同學把書從系辦公室搬到教室來。〕

(15)○鳥屋はなにか新しい鳥が手に入ると、黙って彼のところへ持って来る。

(『禽獸』)

〔賣鳥的如果一有什麼新的鳥到手、就會不聲不響地把鳥送到他這裏來。〕

(16)○東京に行くのなら、ついでにこの手紙を田中さんに持っていてくれないか。

〔如果去東京的話、能不能順便幫我把這封信帶去給田中先生？〕

(17)○お客様を駅まで送っていく。

〔把客人送去車站。〕

(18)○田中さんの誕生日だから、途中でプレゼントを買っていきます。

〔因為是田中先生的生日、在(去的)路上買禮物過去。〕

(19)○張さんは中日辞典を借りていきました。

〔張同學把中日辭典借走了。〕

(20)○子供は十円玉を拾っていきました。

〔小孩把那個十塊錢銅板撿走了。〕

以上の日本語例文とそれに対応する中国語文から、次のことがわかる。

- a. II類の動詞文における「動詞+テクル」「動詞+テイク」に対応する中国語の表現には動詞の後ろに「クル」と「イク」に相当する〔來〕と〔去〕或いは〔走〕を使うものと使わないものがある。
- b. III類の動詞文における「動詞+テクル」「動詞+テイク」に対応する中国語の表現には動詞の後ろに「クル」と「イク」に相当する〔來〕と〔去〕或いは〔走〕という方向補語が必ず使われる。
- c. II類の動詞文の中国語表現には動詞の後ろに〔來〕や〔去〕或いは〔走〕を使うものと使わないものがある理由は、文脈において、II類動詞の動作・行為が行われ、そして、その後ろに続く「クル」、「イク」の動作、行為には問題にされるものとされないものがあるからである。
- d. II類の動詞文に対し、III類の動詞文の「動詞+テクル」や「動詞+テイク」に対応す

る中国語表現には、Ⅲ類動詞の後ろに日本語の「クル」に相当する「來」や「イク」に相当する「去」、「走」の方向補語が使われる。動作主が動作・行為を行い、そして目的語であるものがその動作、行為によって、動作主と暫らく離れないような状態で話し手の方に近づく或いは遠ざかる表現には、中国語ではⅢ類の動詞の動作・行為の後ろに「來」や「去」、「走」をつけたほうが自然である。したがって、これは似た言語形式であるため、中国語を母語とする学習者にはⅢ類の動詞の「動詞+テクル」「動詞+テイク」表現において、違和感を感じない。

(二)Ⅱ類動詞の「動詞+テクル」「動詞+テイク」表現

Ⅱ類動詞の「動詞+テクル」「動詞+テイク」表現を中国語にするとⅡ類動詞の後ろに「クル」と「イク」に相当する「來」と「去」、「走」のつくものとつかないものがあることは上に挙げた例文で分かる。それは、中国語話者には、母語の干渉で、日本語のⅡ類動詞の「動詞+テクル」「動詞+テイク」表現の「テクル」「テイク」を場合によって脱落する傾向があるからと思われる。そのため、中国語話者はどのような文脈には、「テクル」「テイク」を脱落する傾向が見られるか、どのような文脈には「テクル」「テイク」を脱落する傾向がないか、中国語話者の根底にある認識を明らかにする必要がある。

(三)Ⅱ類動詞の「動詞+テクル」表現

日本語では動作主がある動作・行為を終え、話し手や聞き手に近づくような状況を「動詞+テクル」で表現する。一方、日本語と違って、中国語では、文脈では動作主がある動作・行為を終え、動作主が話し手や聞き手に近づくようなことが提示されていても、動作主が何かの理由で来ることを話し手が聞き手に知らせるような場合でない限り、中国語では「Ⅱ類動詞+來」の表現は使わない。例えば、前に挙げた例文(1)(2)(3)。

(1) △「奥さん、どうして品物を置いてきたんですか。」

〔太太、為什麼把東西放在那裏不拿呢？〕

〔配達を頼んだからです。〕

〔我請人幫我送。〕（『ヤンさんと日本の人々』p110）

(2) △田中さん、すみませんが、明日の集合時間を聞いてきてください。

〔田中先生、對不起、請幫我去問一下明天的集合時間。〕

(3) △すみません、財布を家に忘れてきました。

〔很對不起、錢包忘在家裏了。〕

下線の部分はいずれも中国語でⅡ類動詞の後ろに〔來〕を使わない。中国語話者には下線の文は単なる一つの動作・行為が完了したと理解し、〔來〕はⅡ類動詞の後ろには現れない。しかし、動作主が何かの理由で来ることを聞き手に知らせるような場合となると、Ⅱ類動詞の後ろに〔來〕の動詞が用いられる。例えば、

(21) ○友人とレストランで食事をしています。うっかりして、醤油を洋服にこぼしました。友人に「トイレで洗ってきます。」と言いました。

(22) ○同じクラスの友達五、六人とバスケットボールをしている途中、のどが渴きました。友達に「飲み物を飲んできます。」と言いました。

下線の文はいずれも中国語で〔來〕を使う。〔去洗一洗、再過來。〕〔去喝個飲料、再過來。〕前後の文脈関係から明らかであるように、二つの文とも、「来る」ことが発話の重点であり、聞き手が気になるだろうと意識し、戻ってくることを知らせるわけで、「クル」の前に出るⅡ類動詞が表す動作・行為は単にどういう状態で「来る」かを説明する役割をはたしている。例えば、「洗ってくる」は「洗ってからの状態に来る」、「飲んでくる」は「飲んでからの状態に来る」ということになる。したがって、中国語では動作主が何かの理由で「来る」ことを話し手が聞き手に知らせるような状況でないかぎり、〔Ⅱ類動詞＋來〕表現は使わない。

(四) Ⅱ類動詞の「動詞＋テイク」表現

日本語では動作主がある動作・行為を終え、話し手や聞き手から遠ざかっていくようなことを「動詞＋テイク」で表現することができる。一方、中国語では、文脈に動作主がある動作・行為を終え、動作主が話し手や聞き手から遠ざかっていくようなことが提示されていても、動作主が何かの理由で行くことを話し手が聞き手に知らせるような場合でない限り、〔Ⅱ類動詞＋去〕或いは〔Ⅱ類動詞＋走〕の表現を用いる必要はない。

〔Ⅱ類動詞＋去〕〔Ⅱ類動詞＋走〕の〔去〕〔走〕なしに、〔Ⅱ類動詞〕で日本語と同じような事柄を表現することができる。例えば、前に挙げた例文(7)(8)(9)。

(7) △その人は急いでいたようで、さっき降りる時に、傘を電車に忘れていってしまった。

〔那個人好像很匆忙的樣子。剛才下車的時候、把傘忘在電車上。〕

(8) △あの公園にはたくさん野良犬がいるそうで、毎朝、多くの人がそこを通る時に食

物を公園の入口に置いていきます。

〔那個公園聽說有很多野狗、每天早上有很多人經過時會把食物放在公園入口處。〕

(9) △田中さん、今日帰りに一杯飲んでいきませんか。

〔田中先生、今天回家的時候、要不要去喝一杯呢？〕

下線の部分はいずれも中国語でⅡ類動詞の後ろに〔去〕或いは〔走〕を使わなくても正確に情報を伝えることができる。例えば、

(23) 〔剛才下車的時候、把傘忘在電車上。〕

(24) 〔每天早上有很多人經過時會把食物放在公園入口處。〕

(25) 〔田中先生、今天回家的時候、要不要去喝一杯呢？〕

(23)' 〔剛才下車的時候、把傘忘在電車上、就走了。〕

(24)' 〔每天早上有很多人經過時會把食物放在公園入口處、就走了。〕

(25)' 〔田中先生、今天回家的時候、要不要去喝一杯、再走呢？〕

上に並べた例文(23)(24)(25)を例文(23)'(24)'(25)'と比較してみると、(23)'(24)'(25)'の文の〔就走〕〔再走〕部分は明らかに過剰使用である。

中国語では、動作主がある動作・行為を終え、動作主が何かの理由で遠ざかっていくことを話し手が聞き手に知らせるような場面となると、Ⅱ類動詞の後ろに〔去〕或いは〔走〕という動詞が用いられる。例えば、

(29) ○友人とハイキングに行きます。途中、友人に「少し疲れましたからここでちょっと休んでいきましょう。」と言いました。

〔與友人去郊遊。走到一半、你對友人說：「有點累了、在這裏休息一會兒再走吧。」〕

(30) ○京都に行く途中、奈良に住む友人の田中さんを訪ねました。「もう遅いから今夜一晩泊まっていきなさい。」と田中さんが誘ってくれました。

〔去京都的途中、拜訪了住在奈良的朋友田中小姐、田中小姐邀我住、她說：「已經很晚了、今晚請在這裏住一宿再走。」〕

下線の文はいずれも中国語で〔去〕或いは〔走〕という動詞が用いられる。例えば、〔休息一會兒再去。〕〔請住一宿再走。〕前後の文脈関係から明らかであるように、二つの文とも、「行く」ことが発話の重点であり、聞き手が気になるだろうと意識して、遠ざかっていくことを知らせるわけで、Ⅱ類動詞が表す動作・行為は単にどのような状態で「行く」かを説明する役割をはたしている。例えば、「休んでいく」は「休んでから

の状態で行く」、「泊まっていく」は「泊まってからの状態で行く」ことになる。したがって、このような表現において、中国語ではⅡ類動詞の後ろに〔去〕或いは〔走〕の動詞は不可欠である。

(五)結論

日本語と中国語のⅡ類動詞の「動詞+テクル」「動詞+テイク」〔動詞+來〕〔動詞+去〕或いは〔動詞+走〕の表現を観察してきた結果、その発話形式を次のようにまとめることができる。動作主が「来る」或いは「行く」ことを話し手が聞き手に知らせるような状況を除き、動作主がある動作・行為を終え、それから、話し手に近づいてくる或いは遠ざかっていくような状況を文脈がすでに提示している場合でも、中国語では〔Ⅱ類動詞+來〕、〔Ⅱ類動詞+去〕或いは〔Ⅱ類動詞+走〕の表現において〔來〕、〔去〕或いは〔走〕を述べる必要がない。したがって、中国語話者には、「Ⅱ類動詞+テクル」「Ⅱ類動詞+テイク」のような日本語表現を学習するときに、なじまないと感じ、「テクル」「テイク」を脱落して表現する現象が多く見られる。

<注>

(1)森田良行・松木正恵(1989)を参照。

(2)例文の冒頭に付けている○印は中国語話者には違和感が感じられない日本語文。

(以下同)

(3)中国語は〔 〕括弧の中に示される。(以下同)

(4)例文の冒頭に付けている△印は中国語話者にはなじまない日本語文。(以下同)

<参考文献>

寺村秀夫著 (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

日本語教育学会編 (1982)『日本語教育事典』大修館書店

宮島達夫・仁田義雄編 (1995)『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』

くろしお出版

森田良行著 (1990)『日本語学と日本語教育』凡人社

森田良行・松木正恵著 (1989)『日本語表現文型』アルク

市川保子著 (1997)『日本語誤用例文小辞典』凡人社

穂積晃子著 顧海根・李強譯 (1994)『中國人學日語常見病句分析 100例』笛藤出版
劉月華・潘文娛・他著 (1996)『實用現代漢語語法』師大書苑有限公司

<用例の出典>

国際交流基金『テレビ日本語講座初級 I スキット ヤンさんと日本の人々』大新書局
川端康成『禽獣』新潮文庫